

泥中の蓮

各務ヶ原市 佐々木 賢成

今から約30年前の事です。役所へ出生届を提出しに行き、ある問題が生じて、スッタモンダした後に窓口の係りが私にこう言いました。「とにかくこの漢字は人命には使用できません。再び考えておいでください」と。その人命に使用できないとされた漢字は、草冠に蓮と書き、読み方は、訓読みでハス、ハチス、音読みだとレンというそれです。その後、人名に使用可能な感じは改定が行われ、かつては使用できなかった先ほどの漢字が使用可能となり、皮肉なことに男の子の名前ではありますが、ここ何年も人気第一位の座を保っているとのことです。お聞きの皆さんの周りにもレン君という男の子がみませんか？では、なぜこの漢字がこのまれるのか、というと、蓮の持つイメージにその要因があるようです。蓮は、泥の中に咲きます。そこから、泥の中にありながら、泥に染まらず美しい花を咲かせる。人生の不安、という泥の中でしっかりとたくましく育て生きていってほしいという願いとなるでしょう。映画「男はつらいよ」の主題歌の2番にもドブに墮ちても根のある奴はいつか蓮の花と咲く。とあるようにこれが一般的な蓮のイメージなのです。では親鸞聖人はこの蓮に対して、どう意味を考えられているのでしょうか。『教行信証』の中では『維摩経』という經典の一説を引用されています。それはこのような文章です。『高原の陸地には蓮華を生ぜず。卑湿の淤泥にすなわち此の華を生ずるが如し』と。つまり清らかな所には蓮は咲かない。ドロの中にこそ、ドロを養分としないと、蓮は咲かないのだと。泥を人間の苦悩不安とするならば、一般的には、やっかいなもの、嫌うものとしているが、聖人はそれを大切なものとされています。